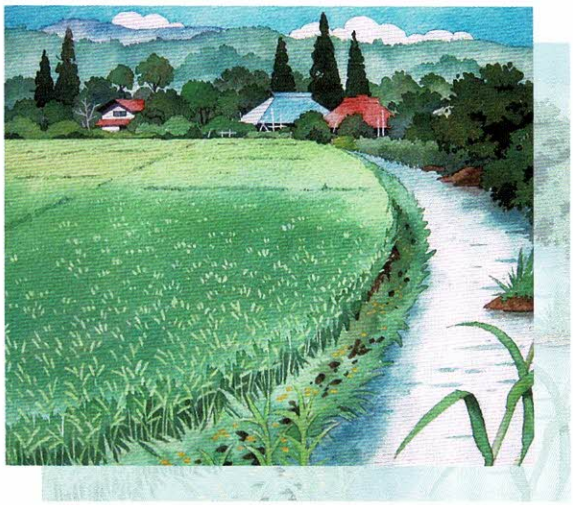
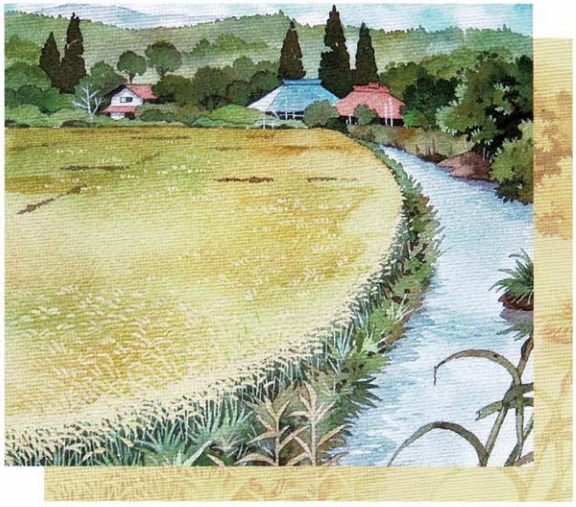
令和２年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集





喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長　大場　健哉

今年も市内全小学校十七校、千四百七十六名の児童が市小学校農業科に取り組みました。コロナ過の中ではありましたが、各小学校農業科支援員の皆様をはじめ、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立耶麻農業高等学校様等々、多くの関係機関の皆様のご支援とご協力をいただきましたことに対して心から感謝申し上げます。

昨年度から、新型コロナウイルス感染症が全国に拡大し、緊急事態宣言が出されました。本市でも市内小中学校に臨時休業をお願いするとともに、その後の学校再開に際しましては、感染症拡大防止策をとりながら、土曜授業の実施と夏期休業の短縮による授業日を確保し、変化と潤いのある学校生活をとおして、学びの保障を行ってまいりました。コロナ過の中では、農業体験が思い通りにできない状況も予想されましたが、児童の作文からは、自然体験から得られた気付きや思いが素直な文章で綴られていました。例年とは大きく違った学校生活でしたが、例年と同様の大きな成果があったと安堵しました。

今年度の作文を読み、心に残ったことが二つあります。一つ目は、農業科と他教科の関連が図られ、農業科をとおして学ぶ」ことが意識された作文が増えてきたことです。ある児童は、水やりの際に、サトイモの葉の上で水滴が滑るように流れ落ちることに気付き、工業製品に農業の技術が生かされていることを知って驚いたと書き

記していました。このことには、総合的な学習の時間を用いた小学校農業科と、関連する教科との横断的な学習を進めてきた各学校の成果の一端が表れており、学びの広がりが感じられました。

もう一つは、「感謝」「協力」「みんなで」などの言葉です。作文からは「作物を育てる中で協力の大切さを知った。」「友達のよさを知った」来年もみんなで喜びを共有したい」「農業科支援員さんを尊敬します」などの思いが書かれていました。これらの言葉が今まで以上に心に残った理由は、コロナ過前までに、当たり前と思っていたことがそうではなかったと考えさせられた一年だったからかもしれません。活動が制限されたり自粛したりする社会の中、子どもたちは、友達といっしょに何かをする喜び、決して一人ではできないことでも協力することで成しとげられることに気付いたのだと思います。そして、支えとなる人々の姿が見えてきたのだと思います。

今年度も、市内全小学校十七校の三年生以上の児童が、小学校農業科作文コンクールの学習に取り組みました。紙面の都合上、入賞した四十五点の作品のみを掲載いたしますが、農業科作文コンクールに取り組んだ全ての児童にありがとうという感謝の気持ちを伝えたいと思います。

結びに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生始め、研究会での貴重なご意見をいただくとともに、審査においても慎重に審査していただきました審査員の皆様にも感謝申し上げます。今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたしまして、作品集発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

寄稿

「世界の課題・ＳＤＧｓにつながる知性を育む喜多方市小学校農業科」

関東学院大学教授　佐藤　幸也

「コロナ」という言葉があふれています。世界中の人々がこのウイルスに感染し、または感染するかも知れないという不安の中で暮らしています。今までの科学ではまだ解決が難しいからです。しかも、これから新しいウイルスが世界に広がるとも言われており、そうしたことなどへの不安は、私たちの心を徐々に壊していきます。互いに信じ合えなくなり、みんなの心に暗い影が迫ってきます。その不安とは私たちが**生きることへの不安**です。

この不安を解決するのが医療や経済、政治のあり方です。そして、それらが信頼できるものか、みんなが理解し、協力し合えるものなのかどうかを判断する力を育てるのが教育です。教育は人々（みんな）が幸せに、豊かに暮らすことができるようにする学力とモラルや希望などを育てるものなのです。これらを知性と言います。農業科の目的はそこにあります。先生方や市長さん、市民のみなさんが協力し合うのはこのためです。

本来、人間はウイルスや菌などのおかげで生きているわけですから、これを科学的に捉えて適切な対策を取ることが社会を安定させ、人々を安心させます。そして、この対策の要点は、自然や人々の状態をじっくり観察し、これまで人類が積み上げてきた知識や技術の上に新しい知を編み出すことです。この時必要なのは、粘り強く、くり返し、かついろいろな視点・方角から見ること。何よりも「なぜ」「どうすれば」と問うことです。

みなさんは田や畑で稲や野菜に「大きくなれ・おいしくなれ、たくさん実れ」と願い、土づくりや水やり、雑草取りなどを行います。わからないことは支援員さんや先生に聞いたり図書館など調べたりします（アクティブ・ラーニング）。病気になりそうな作物を見ると、どう防ぐか、また周りに広がらないように工夫します。**知性を自ら身に付けようとする本質的（本物の）な学習**をしています。「どうしても知りたい」という気持ちがわきあがり、知恵が生まれるのです。しかも、「一生懸命お世話してみんなを笑顔にしたい」「教えてくれた支援員さん達と喜びを共にしたい」（**共感**）、「自分がさぼるとみんなに迷惑をかけてしまう」という感情（想像力）もふくらみます。知力（確かな学力）と情緒（こころ）が一体となり、豊かな心が育まれます。喜多方市の先人達、蓮沼門三先生や瓜生岩子さんなどの生き方に通じるものです。ここに喜多方の善良な魂がまた生まれてきます。

もともと日本では、自然と向き合い、ていねいに観察し、実験しながらその特徴を学び、自然と共生してき

ました。鎮守の森などがその象徴です。ですから、いのちに学ぶ「小学校農業科」は教育の宝なのです。

今日の世界は、地球からあらゆるものを奪い、莫大なエネルギーや資源を消費し、技術とシステムで運営する高度消費社会です。人類は、便利で快適が当たり前、科学（技術）とカネで大概のことは解決できると思い込んで来ました。そこにコロナです。生命体・生態系の危機にある自然・地球からのしっぺ返しのようにも思えます。

地球はいのちのゆりかごです。ウイルスも含めてあらゆる生命体、生命ではなくてもいのちを作り出す元となっている空気、水、大地も同じ地球の仲間達です。地球は瀕死の状態にあり、動植物のいのちも失われています。世界の人々は協力して未来に命をつなぐことが大切です。これをＳＤＧｓと言います。喜多方と同じように、ドイツはじめ欧米などでは森の中の学校や農山村に滞在して学んでいます。大学は豊かな自然に囲まれています。日本でも一流と言われる学校ほど農業・農山村や自然での学びを大切にしています。２０１５年ノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智先生は農業が研究の原点と語っています。分かち合いと共同を基本とする農村の暮らし方に学ぶノーベル経済学賞もあります。農業と農山村で得られる学びが地球を未来につなぐのです。人類は病や自然災害を克服するため、これまでも「農」から学んできました。農業は地球を学び、地域や世界の人々が協力し合いながら、みんなを幸せにするための最も大切な学びとも言えるのです。

入賞作品

目次

【大賞】

大好きなお米のこと　熊倉小学校　五年　高畑　優翔　12

感しゃの気持ちをむねに　堂島小学校　三年　渡部　明梨　13

「おいしい。」の一言で　熊倉小学校　六年　高畑　莉琥　14

サツマイモを育てて　駒形小学校　四年　鈴木　美結　15

みんなで作ったダイズ　第一小学校　三年　皆川　瑛太　16

【優秀賞】

農業科で学んだ「結」の心
熱塩小学校　六年　根本　あかり　17

努力の味は特別な味
姥堂小学校　四年　戸田　絢乃　18

ぼくが農業科で大切だと思い、分かったこと
堂島小学校　五年　渡部　峻　18

畑の生き物たち
熊倉小学校　四年　高畑　颯空　19

みんなで協力
熊倉小学校　三年　小林　永愛　20

サトイモ作りで成長した僕
第一小学校　五年　渡部　結斗　21

学びを生活に生かす
松山小学校　六年　岩田　優里愛　22

カボチャにかんしゃをこめて
塩川小学校　三年　荒川　ももか　23

野菜っておいしいな
高郷小学校　四年　齋藤　歩音　24

「おいしく食べて思いをつなぐ」
第一小学校　四年　竹野　奏資　25

【農業科賞】

ついにかんせいしたとうふ　松山小学校　三年　瓜生　寧々　27
ピーマンっておいしいね　上三宮小学校　三年　佐藤　凪紗　27
ゆめ見るダイズ　豊川小学校　三年　安部　愛理　28
キュウリを育てたよ　姥堂小学校　三年　東條　莉々　29
きらいな物も私の命　第二小学校　四年　安部　ひまり　30
大変だった冬至カボチャ作り！　松山小学校　四年　大房　侑吾　31
農業科の学習を通して学んだこと　上三宮小学校　四年　大野　朋乃果　32
あこがれの農業科支援員さん　熱塩小学校　四年　福王寺　美夢　33
野菜の力はすごい　塩川小学校　四年　湯田　笑菜　34
サツマイモへの感謝　塩川小学校　四年　細山　祐陽　35
農業と食べ物の大切さ　第二小学校　五年　笠原　萌香　35
農業科の学習で見えてきたもの　上三宮小学校　五年　田中　瑠音　36
米作りを体験して　第三小学校　五年　若菜　陽愛　37
食べ物の命とは　豊川小学校　五年　麻生　結愛　38
しょう来に活かせる農業科学習　慶徳小学校　五年　岩崎　豊季　39
小さな命　姥堂小学校　五年　新國　蓮翔　40
農家の方々からのメッセージ　第一小学校　六年　大竹　美優　41

農業科をとおして
第二小学校　六年　五十嵐　祥太　41
気づかされた農業科
第二小学校　六年　新田　紗也　42
いただきますの意味
上三宮小学校　六年　佐藤　美春　43
「いただきます。」「ごちそうさま。」の本当の意味
第三小学校　六年　高野　絢香　44
命を育てる
関柴小学校　六年　高橋　凜　45
命に支えられ、命を頂く
関柴小学校　六年　小関　春陽　46
慶徳タマネギと伝統
慶徳小学校　六年　蓮沼　奏　47
農業の素晴らしさ
加納小学校　六年　鈴木　芽琉　47
作物を作るという厳しさを知って
塩川小学校　六年　星　優育　48
農業科を通して気づいたこと
駒形小学校　六年　五十嵐　宣喜　49
笑顔を教えてくれた農業科
山都小学校　六年　正木　夏帆　50
農家の方への感謝と恩返し
山都小学校　六年　折笠　唯月　51
素手で植えることの大切さ
高郷小学校　六年　穴澤　英敏　52
編集後記　53

【大　賞】

大好きなお米のこと

熊倉小学校　五年　高畑　優翔

ぼくは、ご飯が大好きです。小柄な方だけれど、ご飯はたくさん食べられます。そんなお米好きのぼくに、ショックなことがありました。

国語で、「資料やグラフをもとに文章を書こう」という学習をしていた時です。ぼくは、資料を探すために、「子ども年鑑二〇二〇」という本を見ていました。すると、「一人が一年間に食べる米の量調べ」のデータがのっていました。そのグラフはどんどん右下がり。つまり一人が食べる米の量は、年々、減っているのです。どのぐらい減っているかというと、二〇一八年では、五十三・八キログラム、それは、五十年前の半分の量になってしまっています。日本人はお米を食べなくなっていると聞いたことはありましたが、その事実を突きつけられてぼくは驚き、そして悲しくなりました。

ぼくは、今年農業科で、自分たちが育てたお米のことを考えました。熊倉小では、米作りの担当は五年生と決まっています。ぼくは、去年から米作りを楽しみにしていました。休校時期があけてから種もみをまき、五月に田植え、そのときは三、四本だった苗は、どんどん大きく太くなり、十月にはたくさんの穂が実りました。今年は、新型コロナウイルス感染防止のために、収穫したお米をみんなで食べる機会がありませんでした。そのため、五年生全員で、袋に分けたり、メッセージをシールにしてはったりして、全校生とお世話になった地域の方々に配りました。みんな、とても喜んでくれました。ぼくも、家で食べた時の新米の味は忘れられません。

今までは、ただ、好きで食べていたけれど、自分の思いが加わると、おいしさが増すことが実感できました。この経験を思い出し、どうしたら、もっとお米を食べてもらえるのか考えました。お米はただいつもあるということではなく、人々の思いや苦労や喜びが集まったものだと知ってもらえればいいと思います。ぼくは、この作文をスタートに、農業科で学んだ思いを発信していきます。

感しゃの気持ちをむねに

堂島小学校　三年　渡部　明梨

「手を合わせてください。いただきます。」

これがわたしたちのきゅう食のあいさつです。わたしは、自分たちでお米を作るまで、この言葉は何も考えずに言ってきました。

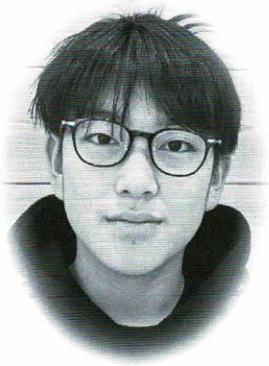
五月、田植えを行う予定でした。しかし、コロナウイルスのえいきょうで中止になり、農業科支えん員さんに植えていただきました。

六月から、いよいよわたしたちの出番です。「ころばし」という道具を使って、じょ草をしました。わたしのうちではトラクターを使っていますが、学校では、昔の道具を使うと聞いておどろきました。とても力がいる作業で大へんでした。

九月には、イネかり、十月にはだっこくを行いました。イネかりは「かま」を、だっこくは「だっこくき」や「とうみ」という昔の道具を使いました。じょ草と同じように力がひつようで大へんでした。ですが、自分たちが大切に育てたお米なので、一つぶ一つぶ大事にしました。

そして十月。「堂島フェスティバル」というものを行いました。今年は、コロナウイルスのえいきょうで、毎年行っていたもちつきができなくなってしまいました。けれど、地いきの人たちがもちをついてくださいました。そのおもちを食べている時に、わたしは、毎日のように言っている「手を合わせてください。いただきます。」の本当の意味が分かったような気がしました。作ってくれた人への「感しゃ」として手を合わせ、「作物の命をいただきます」という意味だということを。その日からは、感しゃの気持ちをこめて、「こんなにおいしいお米を作ってくれて、ありがとうございます。」という言葉を心の中で言ってから食べるようにしています。

このように農業科のくろうを経けんして、わたしが幸せにくらせているのは、たくさんの人のおかげだと気づくことができました。来年からもこの気持ちをわすれずに農業科をがんばっていきたいです。



「おいしい。」の一言で

熊倉小学校　六年　高畑　莉琥

今年の農業科では、ネギとニンジン、米を育てました。作物を作る上で、大切な事を農業科支援員さんが教えてくれました。ニンジンの種は、間を均一に空けてまくこと、ネギの白い部分は土をかけてかくすこと、ぼくたちにわかりやすくていねいに教えてくれました。農業のことについて熱心に教えてくれる農業科支援員さんの姿に、ぼくは、胸を打たれました。

祖父は、農家で、たくさん野菜を育てています。ぼくは、小さいころからそんな祖父の姿を見て、なぜ人のために熱心に野菜を育てているのか、すごく不思議でした。野菜の大きさや形、味にまでこだわって作るのはすごく大変だったと思います。祖父がどうしてそこまで熱心に、野菜を育てているのかがわかったのはイモに会の日でした。

イモに会では、ぼくたちが作ったネギとニンジンが使われました。そのほかにも、ほかの学年が作った野菜もたくさん入っていました。自分たちで作った野菜を入れたイモ汁をたくさんの人に食べてもらいました。

「このネギとニンジン、すごくおいしいね。」

と言われた時、自分が作った野菜をおいしく食べてもらえたことが、すごくうれしかったです。

祖父もおいしいと言われた時、こんな思いをしていたんだなあと思いました。多くの人の「おいしい。」のために熱心にがんばる祖父が本当にかっこいいなと思いました。

ぼくは、まだまだ農業のことを知らないので、もっと農業にふれたいと思いました。将来は、ぼくも祖父のように、家族や町の人など、多くの人の「おいしい。」のためにがんばる農家になりたいと思います。そして、祖父と一緒に農業をやってみたい気持ちが強くなりました。最後に、だれかのためにがんばることが本当に素晴らしいことだと改めて感じました。農業科で学んだことを、これからも大切にしていきます。

サツマイモを育てて

駒形小学校　四年　鈴木　美結

わたしの学校では、毎年サツマイモがつくられています。サツマイモは、一年生から四年生までつくるので、四年生のわたしたちが中心となってつくりました。

みんなで苗植えをして、何日かして見に行ったらサツマイモの葉の元気がありませんでした。このままだとかれちゃうと思いました。何日か後に見に行くとおどろくことに、かれた葉の元から小さな葉がでていました。わたしは、かれなくてよかったと思いました。サツマイモの畑は学校から少しはなれていたので、毎朝の水やりの時は、みんなで走って行きました。そしてみんなで水やりをしたから夏休み前には、サツマイモの葉がしげって、うね全体がつながっていました。サツマイモがたくさんなってそうだと思いました。

夏休みが終わって畑を見に行くと、イノシシにマルチシートをやぶられ、サツマイモが食べられていました。わたしは、みんなでがんばってつくったサツマイモがたべられてしまってくやしいと思いました。今年はいつもよりたくさんとれると思っていたので残念でした。

来年は、イノシシが苦手のものを周りに植えたり、電気さくを立てたりして、対さくをしていれば、サツマイモがたくさんとれるかもしれないと思いました。

ところが、十月には、小さいけれどサツマイモがしゅうかくできたのです。わたしは、イノシシに全部たべられたと思っていました。八月には、中心のサツマイモを食べられていたからです。でも、十月には、くきのと中の根が大きくなり、サツマイモになったそうです。なんてすごい生命力だろうと思いました。

わたしは、農業科のじゅぎょうで、イノシシに食べられても生きようとする植物の力におどろき、感動しました。わたしも、目ひょうにむかって、あきらめないでがんばろうと思います。来年は、初めて米作りをするので、どんなことがあるのか、とても楽しみです。

みんなで作ったダイズ

第一小学校　三年　皆川　瑛太

ぼくは、そう合のじゅぎょうで、ダイズ作りをしました。ダイズのたねは、一年生で育てたアサガオや二年生で育てた野さいのたねとちがって少し大きいたねでした。たねまきをして一週間後には子葉が出てきて、ぼくは、ダイズは育つのがはやいなと思いました。

ダイズ畑の草むしりをするとき、いろいろな虫がいていやでした。でも、虫も葉っぱを食べないと生きていけないし、作物も実をつけるためには虫の力を借りなければならないことを思いだし、がんばろうと思いました。

草むしりは、思ったいじょうにたいへんでした。草はチクチクするし、暑い中、こしをまげて草をむしるさぎょうは、すぐにこしがいたくなりました。みんなも、

「つらいなあ。」

と言っていました。

ぼくは、野さい作りをあまく見ていたと思いました。じっさいに体けんすると、とてもたいへんな仕事だと分かりました。

こんなにたいへんな仕事を農家の人たちは毎日やっているんだと思うと、野さいをそまつにあつかってはいけないと思いました。そして、ぼくたちのために、手間をかけて作っていることをぜったいにわすれてはいけないと思いました。

毎日の給食にも、たくさんの野さいが使われています。食べのこしてざんぱんになった野さいも、農家の人が作った大事な作物です。ぼくは、農家の人のためにも、これからは、のこさずに食べなきゃと思いました。

ダイズ作りはたいへんだったけど、野さいを作ることは楽しいなと思いました。畑に行くたびに、ダイズがどんどん大きくなっていて、元気に育っているのを見ると、ぼくまでやる気が出てきました。農家の人も同じ気持ちなのかなあと思いました。

【優秀賞】

農業科で学んだ「結」の心

熱塩小学校　六年　根本　あかり

「えっ農業科」

私は、四月に熱塩小学校に転校してきた。前の学校には農業科の授業はなかったので、どんなことをするのか興味津々だった。田植えの日、作業の前に、私には不思議なことがあった。それは、「こびり」と言って、作業の前に、地域の方々が作ってくれたもち米とアズキのおにぎりをみんなで食べることだ。

「なぜ、こびりをみんなで食べるのですか。」

と支援員さんに聞くと、

『結』という言葉を知っていますか。」

と聞かれた。私は初めて聞いた。

「昔、田植えでは、多くの人手が必要だった。そこで、地域のみなさんで助け合った。それが『結』です。その時、感謝やつながりの気持ちとして「こびり」がふるまわれたんです。」

と説明してくださった。

この話を聞いて、田植えは機械で作業すると思っていたので、人と協力することは、人と人の結びつきが相手への思いやりだったり、優しさにつながっているのではないかと私は思った。

田植えを実際にやってみて田んぼに入ると動きにくい、転びそうになった。低学年とペアになって作業をしたが、したことのないことを教えるのはとても大変だったが、協力しながら作業ができて楽しむこともできた。

五ヶ月間育てた米を収穫した頃、「笑顔の赤飯届け」という活動の話があった。今年はコロナのためできなかったが、収穫したアズキともち米で赤飯をつくり、地域のお年寄りに配ると、みんな喜んで楽しみに待っていてくれると聞いた。この活動も人と人の結びつきだと思った。

これからの社会は、デジタル化、個別化が進み、便利な世の中になる。しかし、人とのつながり、思いやりの心、つまり結びつき「結」の心を忘れない社会にしていきたい。

この事は世界共通だと思うので、私の将来にも生かしていきたい。

努力の味は特別な味

姥堂小学校　四年　戸田　絢乃

ある日の給食、メニューはイモじる。いただきますのあと、先生が、

「今日のイモは、四年生が育てたサトイモです。」

と言った。とろとろしていて最高においしい。自分でしゅうかくしたイモは特別だ。

去年はサトイモの実も葉もうまく育たず、少ししかしゅうかくできなかった。今年は、水やりもしっかりやって、去年の反省をいかして、マルチのすき間のあなから生えているざっ草一本一本にまで気を配って、栄養がとられないようにしっかりぬいた。一本でもざっ草が生えたら、ぬくことをくり返し、きれいな畑で育てることができた。夏休み明けのサトイモは、去年の様子とは全くちがっていた。くきが高くのびたし、とても太い。今年はたくさんのしゅうかくができそうだなと思った。サトイモはたくさんの水が必要だそうだ。もしかしたら、七月にたくさんの雨がふって、八月に暑くなったことが、サトイモの成長につながったのかもしれない。

ついにしゅうかくの時。最初にくきを切った。切ったくきは、大根のように太かった。次はとうとう実をほり起こす番だ。イモをきずつけないように、はなれたところからおそるおそるほり起こした。おやイモには、こイモがごろごろついていた。ミニトマトくらいのイモが五、六こついていた去年とは比べものにならない。太く大きくなったくき、たくさんとれたサトイモに、とにかく感動した。

父や母が小学生の時には、農業科はなかったそうだ。今も、いとこの学校には農業科なんてないらしい。こんなに楽しい農業科がないなんて、なんてかわいそうなんだろう。ざっ草をむしったり、毎日水をやったりするのは面どうだ。でも、自分たちの力で大きく育てて、野菜をたくさんしゅうかくできた時には、うれしさや達成感がある。こんなけい験が毎年できることは特別なのかもしれない。この日のイモじるは、半年間の努力の味だ。

ぼくが農業科で大切だと思い、分かったこと

堂島小学校　五年　渡部　峻

ぼくが農業科の学習で一番大切だと思ったことは、何か

をやりとげるためには、毎日の苦労の積み重ねが必要だということです。

理由は、三つあります。一つ目は、大きい作業をやっただけでは、野菜や米が育たないからです。大きい作業というのは、種まき、苗植え、収かくなど多い人数でやる作業のことです。水やり、草むしりなどの仕事を毎日やらないと、しおれて栄養などがなくて育たなくなり、かれてしまい、たべられなくなってしまうからです。

二つ目は、大きい作業だけやっていたら、収かくしたとしてもそんなにうれしくならないからです。ぼくは、家では、大きい作業だけやって、その後は、おじいちゃんやおばあちゃんに毎日の大変な作業をまかせているので、収かくした時には、そんなにうれしくありませんでした。でも、学校では、おじいちゃんやおばあちゃんのやっている水やりや草むしりをやるので収かくした時のうれしさがちがうということが分かりました。

三つ目は、食べた時の気持ちがちがうからです。なぜかというと、大きい作業だけやっただけの家の野菜を食べた時は、「収かくした野菜だ。収かくつかれたなぁ。」としか思わないで食べているけれど、水やりや草むしりなどの大変な作業をやった学校で育てた野菜を食べた時は、「水やりとか、草むしりとかをがんばったなあ。何か家で食べる時よりおいしいなあ。」と思えました。クラスのみんなと育てた野菜は、がんばった気持ちやつかれた気持ち、楽しかった気持ちがたくさん入っているので、食べた時の気持ちがちがうのだと思いました。

ぼくが農業科で分かったことは、農業でも他のことでもパッと早くかん単にできることはないということです。ぼくがやっている陸上競技でも、何度も何度も練習して、少しずつでも努力することが大事だということが分かりました。

畑の生き物たち

熊倉小学校　四年　高畑　颯空

「サトイモの葉の上に、はい色の虫がいます。」

夏休み明け、朝、水やりに行った友達が言いました。本当かな、とみんなで見に行くと、葉っぱをむしゃむしゃと食べていました。ぼく達は、え？と思いました。小さい、初めて見る青虫のような虫でした。その日から毎日観察し

ているとどんどん大きくなっていきました。色も黒くなり、オレンジのはん点と角が出てきました。友達が言いました。

「この虫は、サトイモの葉しか食べないみたいだ。他の野菜にはいないよ。」

インターネットで調べてみると、セスジスズメガの幼虫で、サトイモの葉だけを食べる虫でした。まずい、このままにしておいたら葉っぱが全部なくなっちゃうと思いました。ぼく達は、次の日から、毎日水やりの時に、指ではじいて葉っぱから落としました。数週間たつと、いなくなりました。

去年はトウモロコシのポップコーンを育てました。もうすぐしゅうかくできるという時に、カラスがむれでやってきて、ほとんど食べていってしまいました。ぼく達は、がっかりしました。今年は、初めて育てたサトイモに虫がつきました。野菜を育てるのは、大変だと思いました。

サツマイモをほった時には、ネズミがいました。ネズミが草むらにげたのを見て、みんなおどろきました。そのまま土をほっていくと、子ネズミが土の中にいました。

「かわいい。」

みんなでそっと見て、また土をもどしました。サツマイモを食べたあとがありました。でも、ぼくは、サツマイモをあげてもいいなと思いました。

農業科二年目になって、ぼくは、畑にはたくさんの生き物がいることを感じました。ぼくたちのたいせつな野菜を食べられることもあるけれど、生き物とふれあえるのは楽しいです。来年の農業科が楽しみです。

みんなで協力

熊倉小学校　三年　小林　永愛

私たち三年生は、どんなことにも「協力」を合言葉にしています。そんな私たちが協力して、サツマイモとサトイモを育てました。

まず、うね立てをしました。始めてだったので上手にできるか心配でした。ですが、農業科支援員さんに見本を見せていただき、

「作物が育つように心をこめて土をもってね。」

とご指どういただいたので、上手に土をもることができてよかったです。

次に、マルチはりをしました。みんなで協力しながら、

空気が入らないように心と息を合わせて行いました。みんなで協力すると、うまくできたのでうれしかったです。

それから、なえうえをしました。そこで農業科支援員さんから、

「サツマイモはねかせてうえるんだよ。」

「サトイモは土の中にうえるんだよ。」

と教えていただき、同じイモなのにうえ方がこんなにちがうんだなとびっくりしました。

それから毎日、みんなで協力しながら、水やりをしました。時々、じょそう作業もしました。さいしょは「楽しい。」と思っていましたが、だんだん「めんどうだな。」と思ってしまっていました。なので、植えたサツマイモとサトイモへの気づかいをしていないこともありました。

でも、こんな日が続いても、みんな毎日、サツマイモ、サトイモのことを思って一生けん命水やりをしていました。そんなすがたを見て、いつのまにか私もどんどん「めんどう。」から「元気に育ってね。」という気持ちに変わり、心をこめて育てるようになりました。

そして、いよいよしゅうかくの時。サツマイモもサトイモも、マルチをつきやぶるほど大きく育ちました。くきは太く、葉は私の手より大きくなっていました。これは、私たちの声がけ、みんなとの協力、たくさんの方々にお手伝いいただいたおかげだと思います。

来年もまた、みんなで協力して、植物を育て上げて、その時のよろこびを感じたいです。

サトイモ作りで成長した僕

第一小学校　五年　渡部　結斗

「今年も農業が出来るんだ。よかった。」と先生からサトイモを作ると聞いたとき、そう思った。今年から転校した僕は、まだクラスに慣れていなかった。そのため、みんなと協力して作れるか不安だった。

僕と一緒にサトイモを作る班のクラスメイトは、やさしかったため、ほっとした。

「よろしくお願いします。」

とあいさつをしているうちに友達ができた。

サトイモ作りが始まった。苗を植えた。班で協力して水やりをした。

そして、観察をし、草むしりをした。色々やっているう

ちに協力の大切さを知った。

サトイモを育てていて、心配なことがあった。それは他の班より小さいということだ。いくら水やりをしても他の班より小さい。そしてついに差は倍以上になってしまった。僕はどんどん心配になっていった。

そして収穫の日になった。すごくきんちょうした。実がなっていなかったらどうしよう。上手にできていなかったらどうしよう。ドクドクしている。ついに、先生が僕の班のものをほり出した。

「少し実がついている。よし。」

やっぱり他の班よりは少なく小さい実だったけど、うれしかった。そして一人で喜ぶよりもみんなで喜んだほうが楽しいことを知った。その後、みんなでサトイモを洗った。冷たくて少しいやだったけど、うれしい気持ちのほうが大きかったので、平気だった。こうしてサトイモ作りが終わった。

気がついたら十一月。クラスにもすっかり慣れ、話せる人も増えた。

これはサトイモがくれたプレゼントなのかもしれない。それに、色々なことを学ぶことができた。僕はサトイモ作りで大きく成長した。ここで学んだ「協力の大切さ」や「友達の良さ」をわすれずに生活していくことを決めた。

学びを生活に生かす

松山小学校　六年　岩田　優里愛

今年の農業科では、サトイモを育てることになりました。私はサトイモを育てるのは初めてでした。初めて育てる上で学んだことが二つあります。

一つ目は、サトイモは種からできるのではなく、親イモ（サトイモ自体）を直接植えるということです。私がいままで育ててきた野菜は、種やなえから育てる野菜だったのでとてもおどろきました。親イモを植えてから十日ほどで芽が出てきました。芽が出てから数日経つと成長の速度はとても速くどんどん大きくなってきました。私が水やり当番の日、水をあげにいくとひざ下ぐらいまでになっていました。

二つ目は、いままで育てた野菜は水をあげると葉がぬれたままになっていたけどサトイモは葉の上を水が泳いでいるイルカのように流れていきます。それがとても不思議で

おどろきました。総合の時間、草むしりと水やりに行った時のことです。いつものようにサトイモ全体に水をあげている時、葉の上から水は見事に流れていきました。先生が、

「ヨーグルトのふたに、ヨーグルトがついていないのは、こういう技術が使われているんだよ。」

と、言っていました。一体どういうことなのでしょうか。工業製品に、農業の技術が使われているなんて、考えもしませんでした。

「私たちはたくさんのことを自然から学んでいるんだ。」

そう実感することができました。

収穫の時、サトイモのくきは、私たちの肩ほど伸び、葉はとなりのトトロが雨の日にさしているかさほどに成長しました。くきをしっかりにぎり、力一杯引きぬくと、サトイモの周囲には、子イモ、孫イモまで鈴なりになっていました。一つのイモからこんなにたくさん収穫できるなんて感動のしゅん間です。

自然から学んだこと、それは生活の中で生かすべきであり、それが人類の進歩にもつながってくると思います。

カボチャにかんしゃをこめて

塩川小学校　三年　荒川　ももか

今年、私達三年生は、農業科でカボチャを育てました。私の家では先ぞ代々農家をやっています。でも私は一度も手伝ったことがないので上手く育てられるか不安でした。

六月、なえうえの日です。まず初めに畑にマルチをかけました。教えてくれたのは農業科支えん員の菅谷先生と鈴木先生です。

「マルチをかけると草が生えなくなるのもあるけど、土が温かくなって、カボチャが育ちやすくなるんだよ。」

と教えてくれました。私も温かいふとんでねるとぐっすりねむれます。「ねる子は育つ。」と言う言葉も聞いたことがあるので、「土はカボチャにとってふとんなのかな。」と思いました。なえうえの時には、農業科支えん員の先生が教えてくれたように「早く大きくなぁれ。」と思いながら、なえをきずつけないようにやさしくやさしく植えました。

十月、しゅうかくの時です。今年は、雨も多くて、その後は暑さでやられてしまったのか、カボチャの半分はくさっていました。でも、残りのカボチャを使って、みんなで、カボチャのパンケーキを作って食べました。自分で育てた

カボチャは予想以上にとってもおいしかったです。カボチャの苦手な友達も、
「おいしいね。カボチャっておいしかったんだね。」
と言ってニコニコしながら食べていました。
その時に、私ははっとしました。私はタマネギが苦手です。でも、なぜかおばあちゃんが作ったタマネギだけは食べられます。あまくてやわらかいからです。
「野菜の気持ちを考えながら作っているから、ばあちゃんの野菜はとくべつなんだよ。」
といつも話してくれます。作る人の気持ちによって、野菜のおいしさがかわる。このことに自分がカボチャを育ててみて始めて気がつきました。今まで、農業にきょうみがなかった私ですが、農業科の活動を通して作る事の楽しさが少し分かった気がします。

野菜っておいしいな

高郷小学校　四年　齋藤　歩音

今年、農業科の授業で、ぼくたち四年生は、みんなで話し合って四種類の野菜を育てることに決めました。その野菜は、キュウリ、サトイモ、トマト、オクラです。
四月に農業科支えん員さんと一緒に野菜のなえを植えたり、種をまいたりしました。キュウリとトマトは、なえ、オクラは、種をまきました。おどろいたのが、サトイモは、種イモというイモを植えて育てることです。農業科支えん員さんに教わりながら、いちから育てました。野菜を収かくするまでには、たくさんの日にちがかかりました。
「早く大きくならないかな。」
と思いながら毎日水をあげました。いつもスーパーですぐに食べるけど、食べるまでにはいろいろな作業があって大変なんだなと思いました。
収かくしたキュウリとオクラは、みんなで食べたり家に持ち帰ったりしました。残念ながらトマトは、動物に食べられてしまったり、ずっと雨がふっていたから病気にかかってしまったりして収かくすることができませんでした。サトイモは、学校で毎年やっている収かく感しゃ祭でとん汁に入れて食べました。収かく感しゃ祭では、みんなで作ったご飯やとん汁、みそ田楽、サツマイモを野菜の育て方を教えてくださった農業科支えん員さんと一緒に食べました。自分達が育てた野菜を使って作ったご飯は、とてもお

いしく感じました。
農業科の授業を通して、野菜の育て方を学び、野菜を育てる大変さや農家のみなさんのすごさ、ありがたみなどを知ることができました。ぼくは、農業科で野菜を作ったことで家でも野菜を育ててみたいと思うようになりました。また、野菜を育てたいです。今から何を育てようか考えると、農業科の活動が楽しみです。

「おいしく食べて思いをつなぐ」

第一小学校　四年　竹野　奏資

「作るのは楽しそうだけど、食べるのかあ。」
ぼくは農業科でカボチャを育てると聞いて、こう思いました。ぼくは野菜があまり好きではないからです。
六月になえを植えて、カボチャ作りがスタートしました。まずは、毎日の水やりです。畑は遠いし暑いし、大変でした。でも、カボチャのためだから重いペットボトルを運んで水をくれてやりました。すると、カボチャが、
「おいしい。気持ちいい。ありがとう。」
と言っているような気がして、どんどん育っていくのがうれしくて、がんばれました。
そして、一か月もすると、ざっ草が生えてきて、ざっ草ぬきが始まりました。みんなで一生けん命ぬいたら、なんと、見ちがえるほどきれいな畑になりました。このとき「苦労はむだじゃない。」と思いました。
無事にしゅうかくをして、大切に育てたカボチャをむしパンに入れて調理しました。ぼくはカボチャが苦手で、食べられるか分かりませんでした。むしパンができて、ついに食べる時がきました。どきどきしながら食べてみると、すごくおいしくて、口の中に広がるカボチャのあまみが、ふわふわのパンと合わさることで、さらにあまみが楽しめました。
何日かして、祖母の家に遊びに行った時に、むしパン作りをすることになりました。家にある物で作ろうという話になって、ぼくが、
「ニンジンとか、どう。」
「いいね。クルミも入れようか。」
と祖母も言い、作って食べました。カボチャもおいしかったけど、ニンジンもあまくなって、苦手だった野菜がこんなにおいしいなんて、自分でもびっくりしました。

ぼくは農業科を通して、農家の人が作った作物には、苦労や愛じょうが入っていることを学びました。それをおいしくいただくことで、その思いをつなぐことができることにも気がつきました。これからも工夫して食べて、野菜のおいしさを味わっていきたいです。

【農業科賞】

ついにかんせいしたとうふ

松山小学校　三年　瓜生　寧々

「グツグツ。」

とうふ作りをしている時に聞いた音です。作り方の中で一番むずかしかったのは、なべに入れたダイズをまぜることです。なべのそこから、木ベラでまぜました。

「やけどしないようにね。」

と言われながら気をつけてなべをかきまぜました。なべの中でダイズがグツグツしている様子は、あわといっしょにおどっているようでした。

次に、ゆで終わったばかりの白いえき体をぬのに入れ、木に穴のあいた板ではさみました。そして、両手で力いっぱいしぼりました。

「この白いえきが、豆乳だよ。」

と、農業科しえん員さんから教わりました。また、豆乳だけではなく、おからも出てきました。さわってみるとどんどんかたまりがくずれてきました。

「食べてみる？」

と聞かれたので食べてみることにしました。

「パサパサしてるし味もなくておいしくないな。」

と思ってしまいました。だけど、とうふのなかまなのだと知りました。

しぼった豆乳をもう一度なべに入れて温めました。ゆげが顔にあたって、あつくなりました。それでも木ベラでまぜつづけました。

「こげていないかな。」

「うまくできているかな。」

と、心配する気もちでいっぱいでした。

農業科しえん員さんにたくさん助けてもらいながら、ついにとうふができました。しょうゆをかけてみんなで食べたとうふはとくべつな味でした。

はじめてのとうふ作りは、大せいこうでした。むずかしいこともたくさんあったけど、作り終わった時のたっせい感も大きかったです。ドキドキしながらはじまったとうふ作りでしたが、とても楽しい思い出になりました。

ピーマンっておいしいね

上三宮小学校　三年　佐藤　凪紗

「おいしいね。ぜんぜん苦くないね。」

わたしたちは、今年の春も二年生といっしょに、たくさんの野さいを育てました。サツマイモ、トウモロコシ、ミニトマト、ダイズにオクラ、そしてピーマンです。わたしは、本当はピーマンが苦手でした。他の野さいは大すきでしたが、ピーマンだけはあまり食べたくありませんでした。でも、みんなで育てたピーマンの味は、今まで食べたピーマンの中でさい高でした。

五月、わたしたちがなえをうえたピーマンが、大きくなってきました。葉っぱは、二年生の時に育てたミニトマトと、ぜんぜんちがっていました。細長くて黄みどり色をしていました。くきが細くて何本もありました。

六月、ピーマンの花がさきました。花は、白くて花びらは先がとがっていて、ひまわりの花びらにていました。

「かわいい。きれいだね。」

とみんなで言い合いました。その花はちょっと下を向いているみたいでした。

しばらくすると花がかれて、そこにピーマンの赤ちゃんができていました。わたしは、すごくうれしくて、

「たくさんなってる。すごいな。」

と言いました。夏は、とても暑くて川から水をくんでバケツで水やりをするのが、とても大へんでした。でも、みんなで何回もおうふくして水やりをしました。

二学期がはじまると、ピーマンが大きくなっていました。つやつや光ってごつごつしていました。ビニールぶくろにたくさんしゅうかくしました。

九月、二年生といっしょに「むげんピーマン」を作りました。とてもおいしくできました。自分で世話をして、大切に育てた野さいは、お店で売っているものよりあまくておいしかったです。家でもむげんピーマンを作って家族に食べてもらいました。みんなよろこんでいました。野さいでえ顔がふえました。

ゆめ見るダイズ

豊川小学校　三年　安部　愛理

「成長したなあ。前はあんなに小さかったのに。」

六月に植えたエダマメの種が、十月には先生のこしくらいの高さになっている。先生がしゅうかくの仕方を教えてくれた。さいしょに、土から引っこぬく。かんたんにぬけ

るかと思ったら、根が思ったより強く張っていて、びくともしない。手がいたくて、ひりひりした。

「次も、いたいのいやだなー。」

ぬいてみたら、かんたんにぬけておどろいた。

次に、えだからさやを取る。一目見ただけでも百こ以上はある。いや、もっと、数えきれないほどありそうだ。十分かかって、やっと一本のえだからさやを取り終わった。気が遠くなる。やっていくうちに一日かかると思った。すると里和ちゃんが、

「もし一日かかったら、愛理ちゃんの家からごはんもらおう。」

と言った。わたしの家は、学校の畑のすぐとなりにある。わたしは、わらってしまった。わらったら、元気が出てきた。三年生全員で本気になってやったら、一時間でさやを取ることができた。

しかし、作業はまだ終わらない。次は、さやからマメを出すことがまっていた。こしがいたい。さやをあけると、くさっているマメとくさっていないマメがあって、よく見ないといけない。先生にたずねながら見比べた。三年生全員で力をふりしぼって、何とか全部のさやからマメを取り出せた。みんなのおかげだ。

しゅうかくはとてもつかれたけれど、エダマメを育てた中で、しゅうかくが一番楽しかった。みんなの力を合わせたからだ。三年生の力はすごいんだぞと、豊川小学校のみんなに見せつけた気持ちでいっぱいだ。

国語の時間に、エダマメをかんそうさせるとダイズになり、ダイズは豆ふにも、みそにも、しょう油にもなれることを学んだ。私たちはこれから何になるのだろうか、何になれるのだろうか。明日が楽しみでしかたない。

キュウリを育てたよ

姥堂小学校　三年　東條　莉々

五月に、三年生みんなで植えた野さいはキュウリです。農ぎょう科支援員の先生は、新くに先生です。とても明るく元気な先生です。

はじめに、キュウリのなえの植え方を教えてもらいました。まず、ポットを外して土になえを植え、土をかるくかけました。その後に、水をたっぷりやりました。のこった水は、他の野さいにあげました。水やりがおわって野さいを見てみたら、きらきら光っていてよろこんでいるように

見えました。わたしも、え顔になってしまいました。野さいは、生きているんだなあと思いました。

毎朝、水やりをしました。そんなある日、水やりをしようと思って畑に行ったら、キュウリがなっていました。みんな思わず、

「すごい。キュウリがなってる。」

と言いました。

その日、キュウリをかんさつしました。ざらざらしているのもありました。

毎朝、たくさんのキュウリがとれました。その中でも一番長いものは、四十センチメートルです。キュウリは、こんなに大きくなるんだなあとびっくりしました。

そのキュウリは、みんなで分けて家に持って帰りました。わたしは、持ち帰ったキュウリをサラダに入れて食べました。家族みんなが、

「おいしい。さい高。」

と言ってくれました。え顔が見られて、とてもうれしかったです。

新くに先生は、すごいなあと思いました。こんなにおいしくなってみんなのえ顔を見られるのは、新くに先生のおかげだと思います。新くに先生には、まだまだいろいろ教えてもらいたいことがたくさんあります。また、べつの作物の作り方を教えてもらいたいです。

きらいな物も私の命

第二小学校　四年　安部　ひまり

「今年はニンジンとカボチャを育てるの？」私はびっくりして言いました。ニンジンが苦手な私は、あまり気が進みませんでした。反対に、カボチャと三年生の時に育てたジャガイモは、とても自信がありました。なぜかと言うと、去年、ジャガイモを育てるのに失敗したので、今年は成こうさせようと計画を練ったからです。だから、一学期は必死に必死に草むしりをしていました。

夏休みは、畑の野菜のことで、頭がいっぱいでした。待ちに待った二学期、畑に行ってみると、おいしそうなカボチャ、みずみずしいニンジンの葉、かれたジャガイモの葉が私たちをむかえてくれたのです。

「わあ。」

とかん声があがりました。その後、先生の指示により、しゅうかくが始まりました。

私は、しゅうかくをしながら、農業科しえん員のたな木さんがいなかったら、どうなっていただろうと考えました。こんなに、大きく育てられたのは、たな木さんのおかげだと思います。たな木さんには、本当に感しゃしています。

とってもびっくりしたのは、ニンジンです。お店に売っているような大きいニンジンになると思っていたのにとても小さかったのです。

給食の時間に、しゅうかくしたニンジンもいっしょに食べました。私もがんばって一口食べてみると、協力の味がしました。そして、家で食べるニンジンより、おいしい気がしました。その後、「カボチャシチュー」を作ったり、あまったカボチャで「カボチャソテー」を作ったりしました。全部、言葉にできないほどおいしかったです。

自分達で作った野菜は他の何よりもおいしいです。でも、協力しないで作った野菜はおいしくなかったかもしれません。だから、これからは、何事も友達と協力しながら生活したいです。そして、好ききらいもなくしたいです。きらいな物も、私達の命になるから。

大変だった冬至カボチャ作り！

松山小学校　四年　大房　侑吾

ぼくたちは、冬至カボチャを作りました。

一日目は、あんこ作りです。初めに、アズキを洗って、なべに水と一緒に入れて火にかけました。十分煮て、ざるにあけて、一度水洗いをしました。「渋きり」です。その後は、また、水をたっぷり入れて、柔らかくなるまで煮ました。時々「差し水」をしながら、固さを見るのに木べらですくって指でつぶれるか確認しました。この作業は、一時間ちょっとかかりました。みんなで交代しながら、火加減や固さ調べをしました。マメのにおいでいっぱいになりました。おいしそうに柔らかくなった頃、煮汁を飲んでみました。見た目とちがってとても苦く感じました。でも、その後、さとうと塩を入れるとびっくり。とてもふんわりとした甘さが口の中で広がるおいしいあんこに変身しました。

二日目は、いよいよ冬至カボチャ完成の日です。初めの作業は、カボチャ切りです。一口サイズに切りますが、包丁を使って力を入れて切るのは、とても怖かったです。ゆっくり、静かに力を入れて切りました。色がとても鮮やか

な黄色で、においもカボチャの甘いいいにおいがしました。カボチャに、はしが通りました。火を止めて、テーブルに置き、作ったあんこを入れて、優しく混ぜました。味はいつまでも食べていられるくらいおいしかったです。みんな、笑顔でたくさん食べました。

ばあちゃんに、「冬至カボチャ」の意味を聞いてみました。話によると、昔から寒い冬は、保存のきく栄養もたくさんあるカボチャとアズキを煮て、お風呂には「ユズ」を入れて体を温めていたということです。それから、病気の予防にも食べていたそうです。ぼくの家では、冬至でなくても何度もばあちゃんが作ってくれます。つかれている時など、食べると何となく元気が出るような気がします。昔の人たちの知恵はすごいと思いました。これからも農業科として四年生の冬至カボチャ作りを続けていけたらいいと思いました。

農業科の学習を通して学んだ事

上三宮小学校　四年　大野　朋乃果

わたしたち四年生は、そう合の時間に、畑で作物を育てたり、イネかりやだっこくの体験活動をしたりしました。だっこくしたイネは、しめなわ作りの材料にします。今は、しゅうかく祭のじゅんびをしています。

四年生が育てた野菜は、ラッカセイとハクサイです。

ハクサイは、家でそ父母と育てた事がありますが、ラッカセイは初めてなので、ちゃんと育つか心配でした。ラッカセイは、水やりと草取りくらいしかしませんでしたが、いっぱい実をつけてくれました。反対に、ハクサイは失ぱいしました。後でしらべたら、間引きをしたり、土よせをしたり、追ひをしたりと、いろいろなお世話が必要だとわかりました。来年も畑で作物を育てるので、今年の反省を生かしたいと思います。

田んぼについては、新がたコロナウィルスのえいきょうで、田植えが中止となり、とても残念でした。わたしたちの代わりに、農業科支えん員の方が田植えをしてくださいました。そして、立ぱなイネが実りました。そして、そのイネを、手作業でかりとりました。わたしの家でもお米を作っていますが、もちろん機械でイネかりをします。わたしたちは、四かぶ分しかかりとらなかったけど、田んぼのイネを全部かりとることを考えると、昔の人は、本当に大変だったと思います。だっこくも、足ぶみ式でした。

理科の時間は、ヘチマを育てながら気温と植物の成長について学習しました。気温が低くなると、ヘチマのせたけは止まり、ヘチマの実は五十センチメートル以上になりました。イネも、気温が低くなると成長が止まり、同じように実がふくらみました。

来年五年生になったら、田植えができることを楽しみにしています。また、畑の野菜も手間ひまかけて、立ぱに育てたいと思います。

わたしたちのために、お世話してくださった農業科支えん員のみなさんや、地いきの方に感しゃしたいと思います。

あこがれの農業科支援員さん

熱塩小学校　四年　福王寺　美夢

「カブやダイコンは、どうやって作ればいいのかな。」

私が三年生のときに思ったことでした。

カブやダイコンは、今年も三・四年生で育てました。最初に、みんなで種まきをしました。私は種まきをしたのは二回目で、今年は三年生に教えながらまきました。そこで、農業科支援員さんが、

「カブとダイコンの種を三つずつまいていいよ。」

とやさしく教えてくれたとき、農業科支援員さんのカブやダイコンに対するやさしさを感じました。カブやダイコンに私のやさしさをあげたいなあと思いました。

種まきは九月でした。その二か月後収穫でした。私は去年みたいに大きなカブとダイコンかなとドキドキしていました。でも、ぬいてみたら、大きいのはとても少なく、みんな悲しんでいました。それでも農業科支援員さんは、

「小さいのばかりでも、みんなでまいて収穫するまでがんばっていたよ。来年またリベンジしよう。」

とほめてくれました。私はその言葉を聞いてうれしくなり、農業科支援員さんの言う通りリベンジしようと思いました。

農業科支援員さんは、もち米、うるち米の育て方、かんどうカボチャ、宇津野カブといった熱塩加納町だけで作られている野菜の育て方も教えてくれました。イネや野菜の育て方がわかって、おいしくできるととてもうれしくなりました。学校で作られたお米や野菜が大好きになって、たくさん食べたくなります。これも農業科支援員さんからいろいろ教えてもらったからだと思いました。農業科支援員さんは、お米や野菜作りで、いつも私たちだけでなく、野菜にもやさしさをくれていたのだと知りました。これらの

ことから、私は将来やさしい農業科支援員さんになりたいと思うようになりました。これからも農業科支援員さんとたくさんふれ合って、全校生で協力してがんばっていきたいです。

野菜の力はすごい

塩川小学校　四年　湯田　笑菜

「やさしく野菜にせっしてください。野菜にも命があるから。」

と、農業科しえん員さんから教えてもらいました。

わたしたち四年生は、農業科のじゅ業でサツマイモを育てることになりました。サツマイモはよく食べる野菜なので育てることが楽しみでした。

はじめに、サツマイモのなえの植え方を教えてもらいました。サツマイモのなえは長いので、ななめに植えるそうです。ななめに植えるのは、とてもむずかしかったです。植えてから、水やりや草むしりをやりました。夏休み前に行ったときは、つるがどんどんのびていてくきも太くなっていました。草をむしるのは、えいようが草にいってしまわないようにするための大事な仕事です。草がたくさん生えていてむしるのが大へんだったけど、サツマイモが元気に育つように、がんばって草をむしりました。

サツマイモを植えてから四か月、楽しみにしていたしゅうかくの日がきました。土の中にあるサツマイモが、大きく育っているか心配でした。ほってみると大きい物や小さい物、形もいろいろでした。根っこと根っこがくっついていてとてもほりづらかったけど、農業科しえん員さんが教えてくださった、「やさしく野菜にせっしてください。」と言う言葉を思い出し、一つ一つていねいにほりました。全部で百こ以上、重さは六十キログラムありました。短い間でこんなに育つとは思わなかったのでとてもおどろきました。野菜の力はすごいと思いました。

野菜にも命があるから成長します。成長のお手伝いに、わたしは水やりや草むしりをしました。元気にサツマイモが育つようにと思っていました。やさしい気持ちがあったからこんなにたくさんサツマイモが育ってくれたのだと思います。育てたサツマイモはスイートポテトにして食べました。おいしかったです。やっぱり野菜の力はすごいです。

サツマイモへの感謝

塩川小学校　四年　細山　祐陽

ぼくは、六月四日から農業科でサツマイモを育てることになりました。ぼくは、サツマイモを育てるのは、初めてで、

「上手く植えられるかな…。」

と、とても心配になりました。

そして、農業科しえん員の菅谷さんのお話をしっかりと聞き、マルチというビニールを土の上にかぶせ、はじを土でうめるようにして、かぶせました。次に、苗を植える穴をシャベルでほりました。その時、ミミズが大量に出てきて、菅谷さんが、

「ミミズは、落ち葉などを食べて、土の栄養を作っています。」

と優しく教えてくれました。ぼくは、ミミズのことを今までは気持ち悪いと思っていましたが、ミミズは、美味しい農作物を作る手助けをしてくれているのだなと思いました。苗を入れる型をほったら、苗はななめに入れるという事を調べたので、移植ベラをななめのまま土の中に入れ、苗を移植ベラとの間かくの中に入れ、最後に苗の株本に水をかける時に愛情や大きくなってね、という思いを乗せて、たくさん水をかけてあげました。

ついに十月二日、サツマイモを収かくすることになり、ぼくのサツマイモは立ぱに育っていました。ぼくはとても嬉しかったです。十一月九日、サツマイモでスイートポテトを作ることになり、みんなと協力してとても美味しいスイートポテトを作ることができて、ぼくが、今まで食べたスイートポテトの中で一番美味しかったです。その理由は、協力と愛情だったのだと思いました。サツマイモを収かくした時、料理を作っている時、食べている時、ぼくは、みんなの笑顔を見ることができました。ぼくは、友達の笑顔を見ることができて自分まで笑顔になりました。ぼくは、来年の田植えでもみんなの笑顔を見れるといいなと思います。来年も協力して、愛情の気持ちを持って田植えをがんばりたいです。

農業と食べ物の大切さ

第二小学校　五年　笠原　萌香

テレビで自給自足して生活している人を見たことがあり

ます。スーパーで野菜を買わないで、自分たちで育てた野菜を毎日食べる分だけ取ってきて、それを食べています。すごいなと思いました。

私はふだんスーパーで、ふくろに入った野菜を買っているので、農家の人たちの大変さがわかりませんでした。でも、農業科でお米作りや野菜作りの農業体験をして、その大変さがわかりました。田植えでは、最初に苗を植えました。実際に初めて田んぼに入ってみて、楽しかったけど、どろの中なので、歩きづらくて進めないし、こしを曲げて植えるので大変でした。

また、イネかりの時、カマで指を切らないように注意したり、思ってたよりもイネが育っていて、かるのもむずかしかったりして大変でした。かったイネを置く時も、てきとうに置かず、やさしくていねいに置くこともわかりました。みんなで協力したおかげでできたけど、農家の人たちは、少人数でやっていると思うと、すごいなと思いました。イネのたばを運ぶ時も、重かったので大変でした。

しゅうかく祭の時には、お米を食べました。すごくもちもちしていておいしかったです。農家の人たちがあせ水流して一生けん命作ってくれている大変さのおかげで、こんなにおいしいお米や野菜を食べることができるので、作物をいただくことへの感謝をしながら食べました。

これからも、お米や野菜を食べる時は、食べ残しせずに、作ってくれている人への感謝の気持ちを持ちながら食べたいなと思いました。そして、自分のできることを少しずつ実行していこうと思います。

農業科の学習で見えてきたもの

上三宮小学校　五年　田中　瑠音

ぼくたち五年生は、総合の学習や社会科、そして理科の時間に、農業や植物の学習をしてきました。

総合の学習では、畑で作物を育てたり、花だんの世話をしたりしました。イネを育てる学習は、コロナウイルスのえいきょうで、田植えができなくて残ねんでしたが、イネかりとだっこくはできました。

五年生は、畑でゴボウとサトイモを育てました。ゴボウは、四年生のときは細長く育ちましたが、今年は短くて数も少なかったです。それは、間引きや土寄せ、土をやわらかくする中耕などをしなかったからです。

その代わり、サトイモはたくさん収かくできました。で

も、サトイモもゴボウと同じように手を加えたら、もっと立ぱに育ったのかもしれません。来年は、しっかり世話をしたいと思います。

イネかりは、経験があるので上手にできたと思います。落ちているイネも拾ってたばにしました。一つぶも残さないように心がけました。だっこくは三回目ですが、だっこくのときに、引っぱられるようになったりはじけた米が自分の方にとんできたりして、とても大変でした。その後も、つぶの大きさでふりわけたり、ごみになるものを取りのぞいたり、大変な作業が続きました。昔の人の苦労と協力を実感しました。社会科でも、昔の米作りを学習しましたが、実際にやってみて本当によかったです。社会科では、農業の課題や、新しい農業についても学習しました。

理科では、発芽の条件や、ヘチマにはお花とめ花があることなどを学習しました。イネはどうなのか調べてみたら、一つのイネにお花とめ花があることがわかってびっくりしました。

総合の農業科の学習は、社会科や理科の学習と関連しているところが多く、興味を持って学習することができました。来年の農業科の学習が今から楽しみです。

米作りを体験して

第三小学校　五年　若菜　陽愛

私は、五年生になって初めて米作りを体験しました。祖父母が田植えやイネかりをするのを何となく見ていたことはありましたが、実際にやったことは、一度もありませんでした。

まず、一学期の初めごろに種籾まきをしました。黒いトレーに土がしいてあり、そこに種籾をびっしりまいて、その上に土を平らにかけました。私は、種籾をびっしりまくことにおどろきました。ふつう、作物や植物を育てる時、種は土に二、三個程しかまかないからです。

田植えは、残念ながらコロナウイルスの影響でできませんでしたが、学校でもイネを観察できるようにバケツイネを育てることにしました。砂のような土、人口の土、赤い土、黒い土で育てました。

砂のような土はかれてしまいましたが、人口の土は他の土と比べ、水のすい上げがとてもよく、分けつも多いので、土によってこんなに育ち方が違うんだ、と思いました。

そして十月。いよいよイネ刈りの時期になりました。楽しみにしていたイネ刈りが始まりました。

イネ刈りは、かまを使って行いました。かまを使って手作業でイネ刈りをするのは初めてだったので、少し怖かったですが、イネを刈った時の「ザクッ」という音が気持ち良くて、とても楽しかったです。田植えはできなかったけれどイネ刈りはできてよかった、と思いました。

米作りは、他の作物とは違うおどろきがたくさんありました。そして、米作りはとても大変な仕事だということもわかりました。社会科で学習しましたが、出荷など色々な人がたずさわっているので、これからも、感謝してお米を食べていきたいと思います。

食べ物の命とは

豊川小学校　五年　麻生　結愛

私は、農業科で大切なことを学びました。それは、「食べ物の命」です。イネ刈りの時、だめになってしまったイネを見ました。見たしゅん間、心が「ぐっ」となりました。一本だけなのに悲しい思いになりました。イネ刈りをする前日、お父さんから、

「世界には、ごはんが食べられない人たちがたくさんいるんだよ。だから、食べ物をそまつにしてはいけないよ。」

と教えてもらいました。一本だけだめになってしまう、これは残念な気持ち、悲しい気持ちになります。だから、ごはんを残さず食べ、つくってくれた人に感謝して食べたいです。

農業科支援員さんのすごいところは、私たちにやさしく教えてくれたことです。今年初めてお米を育てました。初めてなので分からないことがたくさんありました。イネ刈りのやり方を教わった後、さっそく作業に移りました。イネをうまく切れなかった時、農業科支援員さんが、

「やり方は、親指を上にして、少しずつ切っていくと上手に切れるよ。」

と、教えてもらった通りに切ってみると、上手に切ることができました。

「すごい！上手だよ。」

と農業科支援員さんに言われて、うれしくなりました。農業科支援員さんはやさしく、ていねいに教えてくれることがすてきだなと思いました。

収穫したお米を食べた時、お米にありがたさを感じました。人の手だけではなく、太陽、雨、土、虫などのいろいろな働きのおかげでりっぱに育ちました。もし、雨ばかり

ふっていたら、おいしくできません。太陽ばかり照らしても収穫はできません。やっぱりこの四つの力で育てられているのだと、あらためて知ることができました。ただ、毎日食べているだけなのに、こんなにも苦労してつくられているのだと考えると、ごはんを残さず食べたいと思いました。だから、私は、食べ物の命を大切にして、感謝して食べたいと思います。

しょう来に活かせる農業科学習

慶徳小学校　五年　岩崎　豊季

今年は、田植えと草刈り、イネ刈りを、農業科支援員の荒川さんと一緒に、五・六年生の二十七人で行いました。

田植えを行う前、お兄ちゃんから、

「ヒルにかまれると痛いから注意してね。」

と言われていたので、かまれないように足ぶみをしながら苗を植えました。そのため、姿勢がかなり不安定で、植えるのがとても大変でした。

土をふんだ感じは、想像していたよりもやわらかくてくすぐったかったけれど、よろけた時は友達と支え合いながら、じょうずに植えることができました。

草刈りでは、軍手のすきまから雑草の種が何個も入ってきたので、軍手がつけられないくらい痛かったです。農業科の中で一番大変だったかもしれません。

イネ刈りの時は、かまを持ってきていたのでとても楽しくできました。かまを使うと、イネがバサッと切れてとても気持ちよかったです。それでも、すべて手作業でイネ刈りをすると考えると、昔の人はとても大変だっただろうと思いました。お米や野菜を育てる大変さを知ったので、これからは、今まで以上にお米や野菜などの食べ物を大切にし、食べ残しをしないようにしていきたいです。

また、社会科で習った地産地消の取組のように、喜多方市や慶徳町で育ったお米や野菜、果物などを選んで買うように家族に声かけをし、喜多方市の農業のために自分にできることをしていきたいです。

また、ぼくのしょう来の夢は、動物園の飼育員になることなので、農業をする時があるかもしれません。動物もぼくたちと同じように、おいしい野菜で作った食べ物の方が、よろこんで食べてくれると思います。だから、野菜を育てる時には、農業科で学習したことを生かして育て方を工夫

したいです。農業科は、自分のしょう来のためにも、とても勉強になる学習でした。

小さな命

姥堂小学校　五年　新國　蓮翔

「蓮翔、手伝って。」

以前までは、この言葉がきらいだった。祖母に畑仕事をたのまれたのだ。ぼくの家では小さなハウスを作って三月からトマトの種をまいて芽出しをしている。

まず、草取りから始まった。十二列分の畑をたがやし、芽を出しはじめたトマトの稲を五十センチメートルの間かくに植えた。風でたおれないように、苗をわりばしで固定した。

休校があけて学校でも農業科の学習がはじまった。学校では、スイカ、エダマメ、ジャガイモ、ニンジンの種をまいた。植えたところにたくさんの水をあげた。トマトにもたくさんの水をあげた。トマトの苗の成長に合わせて、長い支柱を立てた。苗がどんどん成長し、花芽を持つようになり、実が実るのが楽しみだった。それからも、わき芽をつみながら支柱にからませるようにしていった。やがて、花芽が実になりどんどん大きくなってきた。ぼくは、その実に色が付きはじめるのを楽しみに待っていた。一週間くらいで、その実に色が付き始めその色を見てびっくりした。それは、トマトの種類により、いろいろな色になってきたからだ。その色は、ふつうの赤色と黄色はもちろんだが、黒色、ピンク色、緑色、オレンジ色などがあり、黄色の中でもこい黄色とうすい黄色ができた。昨年は、ハート型のトマトもあったが、今年はできなかった。

学校で作った作物はスイカで、夏にたくさん食べた。エダマメとニンジンは、全然できなかった。ジャガイモは、五十個ちかくたくさんできた。ぼくは、いろいろなトマトを見て、太陽の光が当たりキラキラかがやいているように見えた。しゅうかくし、どの色のトマトもあまくておいしかった。来年も、

「蓮翔、手伝って。」

と言われるだろう。そのときぼくは大きな声ですなおに、

「はい！」

と畑に向かえると思う。

農家の方々からのメッセージ

第一小学校　六年　大竹　美優

「今年は新型コロナウイルスが流行しているので農業科支援員の方々との農業科ができません。」と、先生に伝えられた時、私はとても悲しくなった。農業科は、私の楽しみだった。昨年、農業の大変さ、農家の方々への感謝をたくさん学んだ。今年は、農業科ができないことをとてもくやしく思った。

私の祖母は、農家の仕事をしている。毎日毎日、雨の日も雪の日も汗をかきながら大切に野菜や米を育てている。先日、祖母に聞いたことがあった。

「毎日、汗をかいてつかれて、農家の仕事をやめたいなと思ったことはないの。」

すると祖母は言った。

「そんなこと、思ったことないよ。野菜や米の世話をしているときは、とても楽しいんだ。そして、おいしく食べてくれる人の顔が思いうかぶと、育ててよかったと思えるよ。」

その祖母の言葉に、とても感動した。農家の人たちは、私たちにおいしく残さず食べてほしい、というメッセージをこめてつくっていること、そのメッセージを受け取って私は毎日、おいしく残さず食べるようになった。そして、地産地消。喜多方市でとれたお米、野菜を食べるようにしている。私は今、ＳＤＧｓの目標に「飢餓をゼロに」の食品を余らせないようにするために取り組んでいる。

私が今年、学んだことは、農家の方々からのメッセージを知り、それに向けた取り組みをしたことだ。汗をかきながら農作業している農家の方々に感謝し、手を合わせて「いただきます。」「ごちそうさまでした。」と言い、おいしく、米一つぶも残さずに食べたいと思う。これからは、地産地消のことをよく知り喜多方の食材を食べ、コロナウイルスに負けない元気な体になりたい。食品ロスを減らして、ゴミのないきれいな喜多方市にしたい。給食や、苦手な食べ物も農家の方々のメッセージを頭に入れて、感謝して食べていきたい。

農業科をとおして

第二小学校　六年　五十嵐　祥太

ぼくは将来、農家になりたいと思っています。それは、

農業科の授業で野菜やお米を作る楽しさやうれしさを感じたからです。

幼ち園の時もサツマイモを作って収穫したり、それを食べたりして楽しかった思い出があります。でも、サツマイモのお世話をしてくださっていたのは、農業科支援員の方やお父さん、お母さんだったのでそこまで大変さは感じませんでした。でも、小学生になり、幼ち園の時よりは、自分たちで世話する部分も増え、収穫する時の喜びは大きくなっていきました。

みんなで野菜の世話をする時間もとても楽しいです。野菜へ栄養がいくように草をむしったり、水やりをしたり、「大きくなるといいね。」と、友達と話しながら野菜を観察したり。今年は、新型コロナウイルスの影響で、長く学校が休みになっていたので、「野菜が無事成長しているか。」と、とても心配でした。だけど、先生や農業科支援員さんにお世話していただき、立派な野菜が育ちました。ありがとうございました。

今回のようなことから太陽や雨、気温、土、虫などのいろいろな働きを必要だということを改めて感じました。

農業の若い世代が少なくなっているというニュースをたまにテレビで見ることがあります。ぼくは、これからの農業を支えられるような農家になりたいです。そして、農業科で作った野菜をぼくの家族は、「あまくておいしいね。」と言って食べてくれたことがとてもうれしかったです。だから、そう言ってもらえるような野菜が作れるように、もっと勉強したいと思います。

気づかされた農業科

第二小学校　六年　新田　紗也

「虫に食べられているから他のがいい」

私は、サツマイモを見るたびに、あんなこと言わなければよかったと思いました。野菜にひどいことを言っていた私は、先生のある一言で作物に対する気持ちが変わったのです。

私達六年生は、メロン、ニンジン、ネギ、サツマイモを育てることになりました。このことを聞いたとき、

「今まで育てたことのある野菜もあるし、大人数で育てるから簡単かな。」

と、思いました。その一方で、農業科の体験を重ねていくにつれて、

「大きく立派においしく育ってほしいな。」
と、作物の成長を期待するようになりました。その時、私の頭の中のどこかで、スーパーで売っているような形や大きさがそろっている「いい野菜」を思いえがいていました。
畑に苗を植えてから、私達は水やりや除草をしながら観察して、成長を見守りました。雨がふると野菜が見えなくなるほどの草がのびてしまうので、むしるのが大変でした。
いよいよ収穫の日が来ました。軍手をして気合の入った手で人参やサツマイモをひっぱりました。すると、想像もしていなかった丸っこい形や人間の足のような形がありました。その中には、虫に食べられて穴があいているものもありました。収穫出来たうれしさと虫に食べられた残念な気持ちが入り混じっていました。「いいもの」を選んで取ろうとしていると、先生の声がしました。
「虫に食べられたのは農薬を使っていないからね。自然の証だよ。形も色々。」
この言葉で、作物に対する気持ちが変わりました。農薬を使わず、虫食いのないスーパーの野菜では味わえない「贅沢」「自然」「幸せ」に気づきました。そして、ありがたみを持つことができました。自然の営みと恵に感謝して、食料を大切にしていきたいです。

いただきますの意味

上三宮小学校　六年　佐藤　美春

「いただきます。」
ご飯を食べる前に、必ず言う言葉です。しかし、みなさんは、「いただきます。」の意味をわかって言っていますか？　気持ちを込めて言っていますか？
私は、「いただきます。」を言うたびに意味を考えています。（どうして、いただきますなんだろう。）
一、二年生では生活科で、三年生からは農業科で、畑で色々な作物作りを行ってきました。
作物を作るためには、畑をうない、肥料を入れてマルチがけ、種まき、わらしき、水やり、草むしりなどたくさんのことがあります。私たちは、農業科支援員の方たちに教えてもらいながら収穫するのを楽しみに作業をしてきました。
しかし、暑い中での作業は汗を流しながら大変でした。また、伸びた草をぬくのはかなりの力が必要でした。
「給食でもよく喜多方産の野菜がでるけど、どの野菜も作る手間がすごくかかるんだね。」
と友達と話したことがありました。母にも話したら、

「そうだね。野菜を作っている人も、その野菜を使って料理している人にも感謝しないとね。」

と言われ、私は、その時「いただきます。」が感謝の意味だと知りました。

「いただきます。」は、「食う・飲む」のていねい語でもあります。生きているものの命を食べて生きている私たちにできる最高の感謝の言葉なのです。

私は、農業科を通して、作物を作る苦労や収穫する喜びを学びました。今まで、何気なく食べているものには、たくさんの人の手が加わり苦労があります。愛情が込められていることを知りました。すべてのことに感謝しながら「いただきます。」そして、「ごちそう様。」に思いを込めて伝えていきます。

「いただきます。」「ごちそうさま。」の本当の意味

第三小学校　六年　高野　絢香

「おいしく、大きく育つといいな。」

わたしは、農業科で作物を育てるたびに、心の中でそう思ってきました。六年間で、たくさんの作物との出合いがありました。

一年生では、ミニトマト、二年生ではサツマイモ、三、四年生ではエダマメ、五年生ではお米、六年生ではジャガイモを育てました。毎年毎年、どれも手作業で、「めんどうくさいな。」とか、「いやだな。」と、思うこともありました。しかし、毎年いろんな作物を育てていくうちに、「やってよかった。」という気持ちになってきました。

わたしは、四年生の時に三小に転校してきました。三小には収穫祭があり、五年生から調理係かかまど係に分かれて準備をします。わたしは、五年生の時から二年間、調理係でした。自分たちで育てたニンジン、サトイモ、ネギ、ダイコンなどをイモ煮にします。野菜を切るのは大変でしたが、完成したイモ煮をみんなで食べた時の楽しさは、よい思い出です。

「おいしい、めちゃくちゃおいしい。」

と、何度も言われ、「やっぱりやって良かった。」と思いました。

六年間、どの作物も手作業で種まきしたり、草むしりをしたり、収穫したりしました。とても大変で、いやだなあと感じる時もありました。しかし、手作業で作物を育てることの大切さを知ったことで、食べ物に対するありがたみ

や、食事の時の「いただきます。」「ごちそうさまでした。」の、あいさつの大切さを、改めて実感することができました。

毎日、なにげなく言っている「いただきます。」「ごちそうさま。」の言葉の中には、食事を作ってくれている人への感謝だけでなく、農業の大切さ、楽しさ、喜びなど、たくさんの思いが込められています。作物を育て収穫し、料理をしていただくということは、本当にありがたいことです。今、わたし達がすべきことは、農業のすばらしさを広めることだと思いました。

命を育てる

関柴小学校　六年　高橋　凜

「また米作りか。」

去年と同じように米作りをすると聞いてそう思った。私の家は農家で、米を作っているのを見ていて、みんなつかれて大変そうだったからだ。でも、おいしいお米を収穫するには、育てるしかない。そう思ってがんばろうと思った。

五月、種をまいた。こんな小さな種からあんなに大きな稲になるのかと、少しおどろいた。でも、一週間もするともう芽が出ていたのだ。「種は生きているんだ。」と感じた。

六月、田植え。去年は田んぼに入るのがとてもいやだった。なぜなら、ドロドロしていたから。でも、入って少したつと、田植えが楽しくなってくる。友達と協力しながら植えた。

十月、まちにまった収穫。なれない手つきでかまで刈った。今は機械だけど、昔の人はこれを手作業でやっていたのだから本当にすごいと思った。あんなに小さな種だったのに、想像以上に大きく育った。私達は種をまいて田植えをして、イネ刈りをしていただけだったけど「裏では農業科支援員さん達が世話をしてくれていたからこんなにも大きなイネができたのだ。」と感謝の気持ちがわいてきた。

米作りを二回して、一回よりも植物を育てることの大切さがわかったし、命をいただいているということもわかった。一人一人が努力したからこそおいしいお米ができたのだ。米という命を毎日のようにいただいている私達は、命を大切にしていかなければならないと思う。ウシもブタも野菜も、命をいただいて私達は生きている。そして、命をつないでいる。だから、食べる前には「いただきます。」食べ終わった後には「ごちそうさまでした。」と、これか

らも命に感謝して食べたいと思う。命のおかげで私達は生きていられるのだから。

命に支えられ、命を頂く

関柴小学校　六年　小関　春陽

去年に引き続き、私達は今年も米を作る。でも、今年が小学校最後の農業になる。

四月、新しい命となる、小さな種を植えた。去年よりもスムーズにみんなと協力して植えることができた。毎日、朝マラソンの前に苗をのぞくと、すくすくと大きくなっていた。あんなに小さかったのにとうれしい気持ちになる。まるで、子を育てる親のようだ。可愛いねと友達と話した。

五月、田植えをした。どろの感触は気持ち悪いし、虫がいやなので、私は田植えが好きではなかった。でも、あんなに元気に可愛いらしく育ってくれた苗をもっと大きく、元気に育てるためと思い、みんなでがんばった。作業が終わる頃には、苗もみんなも私も笑顔だった。達成感が大きくて良い気分だった。

十月、稲刈りをした。頭を垂れた稲穂がたくさんあった。今年も元気にここまで育ったんだとうれしくなった。

みんなと協力して育てた命はきちんと米になった。保健体育で人がうまれるのはとてもきせき的なことだと習った。それは、米も同じだと思う。あんなにも小さかった種の頃からぐんぐんと成長し、私が母や父、周りの人に支えられているのと同じように、米も農業支援員の方々、私達五・六年生、太陽や水など様々なものに支えられて生きているのだ。大変でやりたくない作業もあった。それでも、一生懸命私達が育てた小さな命は、いずれ人を支える食べ物としてお茶わんに中に入っていく、米だけでなく、他の生き物や食べ物、植物も私達を支え、私達に支えられ生きていくきせきの命なのだと思った。農業科で、学んだ命の尊さや感謝の気持ちはいつまでも忘れずにいようと思う。だから、これからも、

「いただきます。」

と、感謝して命を頂いて生きていこう。様々な命と支え合って生きていこう。

慶徳タマネギと伝統

慶徳小学校　六年　蓮沼　奏

とっても甘く、みずみずしく、生で食べても果物のようにおいしい野菜、そう慶徳タマネギと出合い、私は多くのことを学びました。

慶徳タマネギは昔から慶徳でつくられていたタマネギです。七十年前淡路島から伝わった種をトヨばあちゃんという方が育て、品種改良から生まれたものだと農業科支援員の山内さんが話して下さいました。また、

「数年前には、なくなりそうになったけど地域のお年寄りが協力、助け合って栽培を続けました。お年寄りを敬い大切にしてくださいね。」

と笑顔で話していました。私は、おじいちゃんやおばあちゃん、地域に住んでいる人も大切に育ててきたから今につながっているんだと思いました。

私達が収穫した慶徳タマネギは去年の六年生が育ててくれたので、私達が育てたものは来年の六年生が収穫します。私は、これが伝統を受け継ぐことだと気づきました。この伝統のくり返しで慶徳タマネギは未来の子どもたちにも知ってもらえると思いました。

いよいよ収穫です。慶徳タマネギはたくさんあって収穫するのが大変でした。私はどろだらけでも、もくもくと収穫しました。作業の途中から周りの友達の激しい息づかいが伝わってきました。終わったあとは、腰が痛くなりました。

「よっこいしょ。」

「腰がいてえ。」

の声が友達からも聞こえてきます。農業科支援員の山内さんは、毎日同じことをしていると聞き、すごいなと思いました。

最後に山内さんのもっていたポスターを見せていただきました。山内さん、トヨばあちゃんをはじめ、たくさんの人が笑顔で写っていました。

昔から受け継がれている慶徳タマネギをこれからも慶徳で、私が大人になっても育てていきたいです。

慶徳の誇りを持ち続けたいです。

農業の素晴らしさ

加納小学校　六年　鈴木　芽琉

私は、四年間の農業科を通して農業の素晴らしさを学びました。作物は、私たちが生きていくための大事なもので、田んぼや畑は生き物のためにもなります。

五年生までの私は、「楽しいな」とだけ感じていました。友達や先生といっしょに農業をやるのは、もちろん楽しいです。ですが、六年生になったら、「楽しい」のほかに感じたことがありました。

農業をしていると、普段では分からない、農業をしている方の「苦労」と「努力」が伝わってきました。いつもは、食事をする時、

「これ、おいしくない。この野菜きらい。」

などと言っていた時もありました。しかし、農業科で「こんなに時間をかけて作ってくださっているんだ。」「おいしく食べてもらいたくて作っているんだな。」と分かることがたくさんありました。

初めての作業から、最後のだっこくまでみんなでしてきましたが、作業ごとにめあてと「昨年は友達や先生に頼んでいたけれど、今年は自分でやってみよう。」など考えたこともたくさんありました。昨年よりも成長した自分がいたなと思います。

今年の農業科で改めて、作ってくださっている方々の思いや苦労、自分でやってみて普段とは違った考え方など、分かったことがたくさんありました。これからも、家の農業を手伝ったりして、農業と関わっていきたいです。

作物を作るという厳しさを知って

塩川小学校　六年　星　優育

決して悪気はありませんでした。ただ嫌いな物を残すだけだと思っていました。あの頃の自分は狭い世界を見ていて周りの世界観を感じていなかったんだと思います。小学校最後の農業科でダイズをそだてるまでは。

初めは、種からでした。苗からかなと思っていましたから、気が遠くなりそうでした。少し育ち、本葉がでてきた時は心の底からうれしかったです。けれど、畑に植え替えた時、苗はくたくたとしていたのでとても不安な気持ちになりました。夏休みに水をあげに来るなどしてダイズの成長を見守りました。実が茶色にかれた時には残念なお知らせが。

「今年は動物などにやられたので少ない収穫です。」

と、聞いたときは、少しだけ動物などをうらみました。で

も、理科で習った食物連鎖の関係はまさに、弱肉強食なる世界だと感じました。また、農家の方たちの苦労が伝わりました。いままで、農家の方たちの苦労も知らずに嫌いな物を残していた自分が憎く感じました。

収穫した時の喜びは格別で、一つのダイズも無駄にしたくないと思いました。ダイズを育て終えた私たち。私は、少しずつ嫌いな物をなるべく食べるようにしました。農家の方たちは自然や異常気象などと日々戦いながら、私たちの体のために作物を作って下さっています。だから、お米の一つぶでも大切な農家の方たちの血と涙の結晶なので食べようと努力しました。先生などから、

「食べるようになったね。」

と、言われると、やりがいを感じます。

ダイズを育てて、自然の厳しさや農家の方たちの苦労を知って、自分がいい自分へと変われて本当によかったです。これからも農家の方への感謝、

「いただきます。」

を、忘れずに食べたいです。

農業科を通して気づいたこと

駒形小学校　六年　五十嵐　宣喜

今年の農業科で二回目の米作りとなりました。イネ作りの時に、僕は昨年と比べてお米の量が少ないということに気づきました。僕は、何でお米の量が少なかったのか疑問に思ったので、家族に、

「何で今年の米の量が減ったの。」

と聞きました。すると、お姉ちゃんから、

「暑さのせいだと思う。」

と言われました。僕は、暑さがお米に関係するとは思わなかったので、調べてみました。すると、暑さによってお米の収穫量が落ちるということがわかりました。

僕はさらに地球温暖化が原因で気温がだんだん高くなっているということに気づき、これからも気温が上がるにつれ、とれるお米の量が減ってしまうのではないかと不安に思い始めました。

だから、僕は地球温暖化を少しでも防ぐためにはどうしたら良いのかと考えました。調べてみると世界では地球温暖化などの環境問題を解決するためにＳＤＧｓという目標を持ち活動していると知りました。僕は、世界の国々が

協力して取り組まなければいけないほど、地球温暖化が進んでいると大変おどろきました。

そこで僕が環境を守るためにできることは、まず、電気の無だ遣いを減らすことだと考えました。日本の多くの電気は物を燃やして作られています。したがって電気を作る時には地球温暖化に影響があるガスが出ます。だとすると、電気の無だ遣いを減らすことで地球温暖化を防ぐことにつながるのではないだろうか。僕は、よくつけっぱなしになっている家や学校の教室の電気を消したり、明るい時に電気を使わないようにしたりすることも無だ遣いを減らすことになると考えました。

僕は農業科を通して、食物の大切さだけではなく、食物と環境が大きく関係していることに気づくことができました。これからの普段の生活で環境問題に対して僕ができることを見つけて実せんしていきたいです。

笑顔を教えてくれた農業科

山都小学校　六年　正木　夏帆

「こんなに小さいの…？」

思わずつぶやきながら、スイカの種を育苗ポットにていねいに植え、実りを楽しみにしながら毎日協力して水やりをしました。

私は、昨年、山都小学校に転校して来て、農業科の学習に出会ったので、初めてで驚くことがたくさんあります。

子葉から本葉が育ち、苗を畑に移植することになりました。うねを作るために使うくわの使い方にも慣れていなかったので農業科支援員さんの教えに助けられました。

その次の授業で、苗周りの除草をしていると、農業科支援員さんに呼ばれました。何だろうと見ていると、なんと、スイカの葉に牛乳を掛けていました。驚いて理由を考えていると、

「虫がつかないようにするためだよ。」

と教えてくださいました。牛乳を使うことに驚き、記憶にしっかりと残りましたし、農薬を使わないことに安心感を持ったことも事実でした。

ついに、収穫の日が来ました。新型コロナウイルスや降雨続きのために、十分な作業ができずに心配でしたが、予想以上のスイカを収穫することができました。実を手にしたときのずっしりとした重さが感覚として残っています。

農業科支援員さんは、採れたてのスイカをその場で切って試食させてくださいました。とても甘くて、おもわず笑顔になりました。たくさん収穫できたので、給食の時間にも献立に加えていただきました。昼休みに下級生が

「スイカがとってもおいしかったよ。ありがとう。」

と言ってくれたので、自然に笑顔がこぼれたことを思い出します。

私の祖父も農業をやっています。農業科支援員さんに教えていただいたことを思い出しながら食材を食べてくれた人が「おいしい。」と笑顔になるように、畑仕事を手伝いたいと思った一年でした。

「おじいちゃん、私も手伝うよ！」

農家の方への感謝と恩返し

山都小学校　六年　折笠　唯月

皆さんは、食事をするときどんなことを考えていますか。私は農業科の学習を通して、「作物を収穫できた時の喜び」、そして「農家の方への感謝の気持ちをもつこと」を学びました。

今年、六年生では、スイカとサトイモを栽培しました。スイカは小さい種から育て、私たちの顔よりも大きな実ができることに、とても驚きました。収穫できる日を心待ちにしていましたが、雨が続いたために草むしりも全然できなくてしっかり育っているか不安で仕方がありませんでした。

いよいよ収穫の日を迎えて畑に行き、おそるおそる葉やわらをどけてみると、大きくて立派に育ったスイカが目に飛び込んできました。その瞬間、友達と大喜びしてしまいました。給食にも提供されて、みんなが、

「おいしい。おいしい。」

と喜んで食べてくれたことも忘れられない思い出です。

サトイモは販売されているものしか見たことがなかったので、たくさんのいもが密集している様子を見て驚きました。これから、郷土料理の「こづゆ」で使う予定なので期待が止まりません。

四年間、農業科に取り組んできて、作物の栽培者にしか分からない喜びがあるのだなあと実感する一方で、大変な作業に農家の方の努力や苦労を改めて感じることができました。今年のように雨が続くことに、農家の方は私たちと同様の不安を抱いたり、あるいは雨でも作業を止めること

なく、私たちに食材を届けてくれるのだと、尊敬と感謝の気持ちでいっぱいになりました。この授業がなければ、いつも食べている作物に感謝していなかったかもしれません。農家の方の営みがあるからこそ、おいしく食事ができるということを忘れず、そして、感謝の気持ちで残さずに食べることが、農家の方への恩返しになると思うこの頃です。

素手で植えることの大切さ

高郷小学校　六年　穴澤　英敏

昨年、ぼくは初めて素手で田植えをしました。祖父が田植え機を使って田植えをしているのは何度も見たことがあったけど、素手で田植えをするというのは見たことも聞いたこともなかったので、聞いたときにはびっくりしました。六年生といっしょに田んぼまで歩き、農業科支援員さんの話を聞いた後、いよいよ田んぼに入る時がきました。「いよいよかぁ。」と思いました。その時、ぼくの心の中は、「素手で植えるのはどんな感じなんだろう。」というわくわく感と、「もし、どろでよごれたりしたらどうしよう。」という二つの感情がありました。いざ、田んぼに入ってみると、どろがべっとりと足にまとわりつき、うまく動けないし、おまけに、あの大きらいなカエルも近づいてきました。そんななか、六年生がてきぱきと苗を植えているのを、ぼくは、「すごいな。」と思い、それをまねしようと心がけました。そして、作業が終わり、田んぼを見てみると、緑の線が何本も通っていて、始める前とは全然ちがって見えました。「これをぼくたちでやったんだ。」と思うと、とても満足した気持ちになりました。

それから、僕たちは六年生になり、社会科で歴史について勉強しました。そこでぼくは、米作りは弥生時代から行われていたということを知ったのです。ぼくは、「こんな昔からお米を作っていたんだ。この時代はみんな素手で植えていたんだな。」と感動しました。ぼくは、田植えのことを改めて考えてみました。「素手で苗を植えるのは大変だけど、とても楽しいし、みんな仲良くなれるな。」そう思うと、素手で植えることの大切さがわかった気がしました。

今の時代、素手で田植えをする農家はいません。しかし、大変な作業だからこそ、協力することの大切さや満足感を分かち合うことができたのだと思います。この昔からの伝統を、これからも大切にしていきたいと考えています。

令和２年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】　　（敬称略）

関東学院大学教授	佐藤　幸也
喜多方市教育委員会教育長	大場　健哉

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長	飯野　淳
喜多方市ＰＴＡ連絡協議会長(山都小学校 PTA 会長)	田代　哲
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長	長谷川　優子
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査	星　保宣
会津よつば農業協同組合喜多方営農経済センター営農振興課長	和田　清政
喜多方市小学校農業科支援員	山田　義人
喜多方市農業委員会委員	木戸　賢治
喜多方市産業部農業振興課 参事兼農業振興課長	大堀　邦英

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	齋藤　勝芳
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	笹川　光威
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科活動推進員	安藤　美咲

編集後記

農業科担当として、各小学校の圃場の放射線測定や田畑での活動の様子の撮影を担当いたしました。各校に伺った際、汗を流しながら一生懸命に農作業に取り組む児童の姿と、その児童と同じ目線に立ち、わかりやすく指導してくださる小学校農業科支援員の方々の姿がとても素敵でした。また、農業科作文コンクールにおきましても、農業科に対する素直な気持ちが綴られていました。児童が素直な気持ちを表現できるのは、支えてくださる支援員さんのおかげだと思います。次年度も農業科が実りあるものとなるよう、より一層サポートさせていただきたいと思います。

（農業科活動推進員　安藤　美咲）

児童のみなさんの作文を拝見させていただきました。コロナウイルス感染症対策のため活動が制限される中ではありましたが、作文の中には、生き生きと主体的に活動に取り組む姿、驚きや感動、感謝の心、将来の理想の自分の姿などがたくさん綴られており、農業科の学習は児童一人一人にとってかけがえのない素晴らしい活動だとあらためて実感しました。今後も、農業科をとおして、児童の豊かな心の育成、社会性の育成、主体性の育成に取り組んで参ります。

（学校教育課　課長補佐・指導主事　笹川　光威）

今年度は、コロナ禍の中での農業科となりました。「残念ですが田植えができなくなりました・・・」と話す先生方の話を聞き、今後の活動を心配しました。しかし、子どもたちの作文には、具体的な活動をもとにした読み手をひきつける内容が書かれていました。それは、農業科支援員さんや地域の方々のおかげです。ご尽力に感謝いたします。農業科作文コンクールは今年度で１２回目となりましたが、今回も子どもたちの珠玉の作品が揃いました。（学校教育課　課長補佐・指導主事　齋藤　勝芳）

令和２年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

令和３年２月　　発　行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会